

# ポーラの戴冠式

デルフィニア戦記外伝3

茅田砂胡

*Sunako Kayata*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について


- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 沖麻実也



目次

第一話	西離宮の灯り <small>あか</small>	5
第二話	ヴァンツアーの手紙	25
第三話	リュミエント卿の葛藤 <small>かつとう</small>	47
第四話	コーラルの十年	73
第五話	ジャンペール家の団欒 <small>だんらん</small>	95
第六話	ドラ伯爵家の騒動	115
第七話	サヴォア公爵家の事件	137
	あとがき	242
	第十二話 新たなる日々	227
	第十一話 来世の約束	219
	第十話 ポーラの戴冠式・後篇	199
	第九話 ポーラの戴冠式・前篇	181
	第八話 ロッテと薔薇の精	161





第一話  
西離宮の灯り<sup>あか</sup>

——凱旋日当夜〜二日目朝



夜が更けても、サヴォア館はお祭り騒ぎだった。

本宮の祝宴から戻ってきたバルロとロザモンドを迎えようと、続々と貴族たちが訪ねてくる。

非常識な時間ではあるが、絶望的な戦況から一転、奇跡の大勝利を迎えた後だけに無理もない。

本宮の祝宴に参加できなかったリュミエント卿は、若い顔を興奮と感激に真っ赤に染めて、館に戻った二人に挨拶した。

「伯母上、サヴォア公！ 無事のご帰還おめでとうございます！」

ロザモンドは年若い甥に笑いかけた。

「苦勞を掛けたな、リュミエント卿」

「いいえ、滅相もない。わたしごときの苦勞など……」

十六歳のリュミエント卿は涙ぐんでいた。

縁起でもないことなので口に出しはしなかったが、

一時は二度と伯母にも義理の伯父にも会えないかと覚悟したのだ。眼に涙を滲ませながら、卿は満面に笑みを浮かべている。

一門の中で留守を預かった者たちが続々と訪れて、深夜にも拘わらず、サヴォア館は昼のように明々と火を灯し、たいへんな賑わいだった。

そして子どもたちもまだ起きていた。

一階でこれだけ騒いでいたら二階の子ども部屋もうるさくて寝られないところだが、何しろ、広大なサヴォア館である。

子ども部屋には階下の喧噪が微かに届くくらいで、至って静かなものだったが、それでも寝台に入ったユーリーは寝付けなかった。

将来のサヴォア公爵の証であるグラスメア卿を名乗っていても、ユーリーはまだ十一歳の少年だ。

久しぶりに両親と再会した際には、きちんとした口調で勝利を祝う挨拶をしたが、とても両親と席を並べて祝宴に出られるような歳ではない。

子守に「お休みになる時間ですよ」と、いつものように寢室に追いやられたが、眼は冴え渡っている。彼はとうとう諦めて起きあがり、廊下に出た。

隣の部屋の扉をそつと叩く。

「……セーラ。起きているかい？」

双子の妹は返事をしなかったが、部屋の中から、物音がした。

子ども部屋に鍵はない。ユーリーが扉を開けると、硝子窓から入り込む月の明かりが室内をほんのりと照らしていた。

寝台と書き物机、暖炉があるだけの意外に質素な室内だが、その寝台がこんもりと盛り上がっている。今は火も要らない暖かい季節なのに、妹は頭から夜具を被って丸くなっているのだ。

「セーラ？」

話しかけても答えはない。ユーリーは妹の寝台に腰掛けて、ずつと気になっていたことを尋ねてみた。「大広間でのことだけど、妃殿下に何か……失礼な

ことでもしたのかい？」

途端、夜具の塊がユーリーに飛びかかってきた。呆気に取られていた間に勢いよく寝台に倒され、

頭から夜具をかぶせられる。

真つ暗闇の中で、妹の震える声が囁いた。

「……ユーリー、どうしよう……」

泣きそうな声だった。

気の強い妹がこんなふうになるのは珍しい。

同い年の兄妹だが、片方が感情的だともう一人は必然的に落ちついた性格になるもので、ユーリーは焦らずに話しかけた。

「……セーラ。ちよつと離れて。これじゃあ話もできないよ」

のろのろと夜具が離れたので、ユーリーは寝台に座り直した。

セーラは何とも言えない顔で膝を抱えている。

「……本当に、妃殿下が聞いていらつしやるなんて思わなかったのよ」

それだけで何となく事情を察したユーリーだった。同い年の妹は兄の眼から見ても才気煥發で、口が回るが、口は災いの元という諺もある。

「何を言ったの？」

すると、薄暗がりの中で、セーラは思いきり兄に顔を近づけて囁いた。

「……言ってもいいのかしら」

「えっ？」

「……ここで、あの言葉を言ったら、また妃殿下に聞こえてしまうのじゃないかしら」

よほど身に染みているらしい。それ以上に王妃に悪く思われることが耐え難いようだが、ユーリーはあつさり言った。

「気にしなくていいよ。だって、妃殿下はおまえが何を言ったか、もうご存じなんだろう？」

これは少々、兄の物言いに繊細さが欠けていたというべきだろう。

妹は絶望的に呻いて、再び亀のように丸くなって

しまった。

「どうしよう。どうしたらいいんだろう。わたし、わたしもう……死んでしまいたい！」

「セーラ！ 落ち着いて」

兄は慌てて妹をなだめたのである。

「大丈夫だよ。さっきだって、妃殿下はお怒りではなかったじゃないか。——おまえを叱りに来たとはおっしゃったけど」

「言わないで！」

よほど居たたまれないのか、セーラはまた夜具を頭から被ろうとしたので、ユーリーは慌てて夜具を掴んで引つ張った。

「だから、妃殿下は怒ってなどいないよ！」

「……ほんとに？ 本当にそう思う？」

妹は必死だ。兄も大真面目に答えた。

「思うよ」

なぜなら、こんなことは決して口には出せないが、国王を叱りつけている時の王妃は凄まじく恐かった



からだ。特に声を荒らげたわけではないが、緑色の瞳には冷たい炎が燃えていた。

あの視線が自分に向けられたら、はつきり言って、生きていられる自信がない。

比べたら、妹に話しかける時の声は優しかったと言っている。

「妃殿下はセーラを許してくれたんだよ。……何を言ったか知らないけど」

丸まっていた妹はあらためて寝台に座り込んだ。

母親譲りの金髪もくしゃくしゃだが、今の彼女はそれどころではないらしい。

ひどく真剣な表情で再びユーリーに顔を寄せると、恐ろしい秘密を打ち明けるように囁いた。

「……内緒よ。わたし、わたし、こう言ったの。『何が王妃よ。十年も陛下の隣に立ったこともないくせに』って」

ユーリーの顔がさすがに引きつった。

「なんてことを！ ポーラさまに聞かれたら……」

「……ポーラさまの前で言ったの」

ユーリーは天を仰いだ。

ポーラ・ダルシニは謙虚な女性である。

都会から離れた地方の小身貴族の出身だからかもしれないが、中央の覇者であるデルフィンニア国王の寵愛を一身に受ける愛妾という立場でありながら、虚栄とは無縁の性格だ。公にこそしていないが、未だに台所に立つのが好きで、国王や子どもたちの食事を手ずからつくっているという。こんなことは他の王家では（大貴族の家でもだ）ありえない。

現に兄妹の母は台所になど近寄りもしない。下働きの女たちに任せている。

ロザモンドはサヴォア公爵夫人であると同時に、サヴォア家に匹敵する大貴族、ベルミンスター公爵その人でもあるから当然だ。

そんな母には大勢の取り巻きがいる。それも新興貴族などはとても近寄れない。ほとんどが由緒ある家の女性たちだ。家格の等しい公爵家の夫人もいる。

その中には母よりずっと年上の、ユリーリーの祖母のような老婦人もいるが、彼女たちは母のことを『ロザモンドさま』もしくは『ベルミンスター公爵さま』と呼んでいる。

そして、ユリーリーの知る限り、母はその人たちのことを、『何々夫人』と呼び、未婚なら『何々嬢』もしくは『誰々どの』と呼びかけている。

ポーラはそのロザモンドが唯一『ポーラさま』と敬称をつけて呼ぶ女性なのだ。

相手が国王の愛妾だからといって、媚びるような母ではない。

ポーラは真実、母の尊敬を勝ち得ているのだ。

そして、そのポーラは王国でも屈指の王妃の信奉者である。それを知っていたから、ユリーリーは眉をひそめて注意した。

「そんなことをご面前で口に出したりしたら……、ポーラさまに叱られるだろう？」

セーラは殊勝に頷いた。

「お怒りだったわ、とても。すぐに許してくださいたけれど……恐かった。でも、どうしても黙ってられなかったのよ。だから……本当にこの人がデルフィニアの勝利の女神なら、わたしを叱りに来てくれればいいって、そう言ったの」

そうしたら本当に王妃が現れたのだ。

セーラの恐怖も周章狼狽ぶりも領けるが、同時に、彼女は初めて見た自国の王妃に魅了されていた。

「わたし、今までお父さまもお母さまも、妃殿下のことを……ずいぶん大げさに話していると思っていたのよ。だって、どう考えても無理があるでしょ？ ありすぎるくらいよ。この世の者とも思えないほど美しい人がお父さまや陛下を凌ぐ剣の達人だなんてそれなのに……独騎長さまやシャーマンさままで同じことをおっしゃるんだから、がっかりしたわ。大人はみんなこうやって口裏を合わせて、子どもを騙すのねって思ってた」

「わかるよ。確かに無理がある」

寝台に腰を下ろしたユーリーは真顔で頷いた。

「そもそも父上のお話は少し割り引いて聞いたほうがいい。——母上の言葉だけどね」

冷静な長男である。

セーラはうつとりとため息を吐いた。

「……心臓が止まるかと思った。本当に光り輝いていらした。あんなにきれいな方、見たことない」

「ぼくもだ」

一目で魅了されたのはユーリーも同じだ。

二人とも美しい女性なら見慣れている。母の取り巻きの宮廷夫人たちは最新の豪華な衣裳を身につけ、高級な化粧をし、髪も複雑な形に結び上げて凝った飾りを差している。そんな彼女たちが一堂に会しておしゃべりしていると、まるで生きた花たちが咲き誇って妍を競っているようだ。

比べて王妃は化粧もしていない。獵師のような粗末な服装で、言葉遣いもまるで荒くれ男なのに、どんなに着飾った宮廷夫人より堂々として誇らしく、

崇高な感じすらしたのだ。

だが、どうしてももう一つの疑問が残る。

「本当にあの妃殿下が父上よりお強いのかな？」

思わず呟くと、妹も勢い込んで頷いた。

「わたしも同じことを思った。だってあんなに細いお身体で、お母さまよりずっと小柄でいらつしやるのに……」

「後でブライス兄さまに訊いてみよう」

双子の母親違いの兄ブライスは下で行われている

祝宴に参加しているはずである。

セーラは兄に提案した。

「ねえ、上に上ってみない？」

「いいね。行こう」

サヴォア館はただ豪華なばかりの館ではない。

見張り台を兼ねた屋上がある。非常の際には館の扉を固く閉ざして立てこもり、この屋上から眼下の敵に攻撃を仕掛けるためだ。

鍵は掛かっていない。二人は難なく屋上に出た。

ここは二人のお気に入りの場所だった。

昼間だと、二人の姿が丸見えになつてしまうから、主に夜にこっそり上つている。

両親にも内緒の二人の秘密だった。

月の明るい夜なら、月光にはの、白く浮かび上がる一いちの郭かくが一望できる。

暗い夜なら正門から大手門まで延えん々と続つく灯籠とうろうの灯りが美しい。

今夜の景色はそのどちらでもなかった。

二人は思わず感嘆かんだんの声を発したのである。

「……うわあ！」

一いちの郭かくのどこもかしこも煌々こうそうと灯りが点り、真昼のような明るさだ。深夜にも拘わらず、正門、郭門、大手門がすべて開放され、人の持つ手燭てしよくの灯りが蛍ほたるのように、たくさん行き来しているのが見える。

大手門の外に広がる城下町の様子もよく見えた。街の至るところに灯ひが点り、活気に満ちている。

ここまで人の賑わいが伝わってくる。

遠いトレニア湾にもいくつも灯りが浮かんでいる。

商人の船が戻ってきているのだ。

たった十一歳の二人は特別な感慨かんがいを持つて、その光景に見入ったのである。

前にここへ上がつて見た時は、コーラルはまるで死んだ街のようだった。

苦しい戦いくさが続いていた。父の砦とりでも奪われた。

街に活気がなくなつて、最低限の灯りが頼りなく点っているだけで、胸が押しつぶされそうに辛つらくて、とても見ていられなかった。

比べると、まるでお祭りのように華やかで楽しい。

王妃が戻ってきた特別な夜だ。

今夜はきつと、コーラルは眠らない。

「——セーラ！ ご覧よ」

兄が指した方向を見て、セーラは息を呑のんだ。

昼間ならパキラ山の青々とした姿が見えるのだが、夜には真つ黒に迫る巨大な影でしかない。

その中腹に今、灯りが点っている。

そこにある建物はたった一つだけ。

王妃の住居の西離宮だ。

この十年、その建物はずっと無人だった。一度も火が点ることはなかったが、今は違う。

あの灯りの下に王妃がいる。

デルフィニアの勝利の女神が——。

眼下に広がる煌々とした灯りとは比較にならない、ぼつんとした小さな灯りではあるが、今の二人には何よりも崇高な輝きに見えた。

寝間着が汚れるのも構わず、セーラはその場にひざまず跪き、その灯りに向かって手を合わせると、祈るように言った。

「妃殿下。お願いです。どうかあの恐ろしいわたしの発言はお忘れください。決して本心から言ったのではないのです」

ユーリーも妹の隣に跪き、十一歳の少年とは思えないほどげんしゆく厳肅な口調で言ったのである。

「妃殿下。この国を救ってください、ありがとうございます」

ございます。父と母を、そして兄を、わたしたちの元に返してください、心から感謝致します」

セーラはちよっぴり赤くなった。

兄にな倣って、おもむろに付け足した。

「——感謝致します」

エミールとサイラスはまだ暗いうちに起き出して、部屋の窓からそつと建物を抜け出した。

この行動は、実は昨日のうちに、密かに相談して決めていたことだった。

二人が昨日泊まったのはこの城に來た時いつも滞在しているドラ伯爵邸ではない。それだと子ども部屋は二階にあるから、窓からは出られない。

第一、ドラ伯爵邸は二の郭に建っている。

そこで両親に熱心に頼み、特別に父が時々使っている一の郭の離宮に泊まるのが許されたのだ。

「急げよ、サイラス」

「うん」

離宮には彼らの子守をする召使いがいる。

彼らが起き出す前に戻らなければならなかった。

コーラル城には城の各所に寝ずの番が立っている。

薄暗がりの中、二人は見つからないように急いだ。

目指すは王宮の馬が揃っている厩舎である。

そこに今、ロアの黒主がいるのだ。

王妃が黒主に騎乗して凱旋し、その黒主が王宮の

厩舎にいと聞いた時から、これを見に行かないと

いう選択肢は彼らにはあり得なかった。

ロアの領主の孫に生まれた二人にとって、黒主は

祖父にも匹敵する、もしくはそれ以上の英雄である。

二人とも今まで、本当に遠くからしか、その馬を

見たことがない。

黒主は人間が近づくことなど許さないからだ。

その相手が今は手の届く厩舎にいる。

しかし、素直に見たいと頼んでも、聞いてもらえ

ないのはわかっていた。二人とも馬には慣れ親しん

でいるが、王宮の馬ともなれば恐ろしく高価なので、

王族でもない子どもが厩舎に近づくことなど許されるはずがない。

見つかったら、こつぴどく怒られてしまう。

まだ朝靄が残る中、二人は大冒険に緊張しながら、

そつと厩舎に近付いていった。

思ったとおり、既に人の気配がする。

この厩舎は二階が厩番たちの住居になっていて、

夜明けと同時に扉を開けるのが日課らしい。

二人が隠れて見ていると、厩番の男たちが次々に

馬を引いて厩舎から出てきた。

朝の運動をさせるためだろう。

ロアでは馬は放し飼いである。いちいち引き出す

必要はないが、厩舎で飼育する馬はこうして馬場で

運動させてやらなくてはならない。

物陰に隠れた二人はどきどきしながら見ていたが、

運動場に引き出された馬の中に黒主はいなかった。

ロアの黒主はその名の通り、真つ黒な馬体だ。

近くで見たことはなくても、見逃すはずはない。

「いないね……」

「どうしたんだろう?」

人が誰もいなくなつたので、二人は思い切つて、そつと厩舎を覗き込んでみた。

反対側の入口も開いていて、中は意外に明るい。

大きな厩舎の中にはまだ何頭も馬が残っていた。

危急の用件の時に馬がなくては話にならないので、半数は残してあるのだろう。

さすがは国王の騎乗する馬だけあつて、ロアでも滅多に見えないような立派な馬ばかりである。

訓練も行き届いているようだった。突然知らない子どもが入つて来ても騒がない。

忍び込んできた二人を不思議そうに、大きな眼で見つめているだけだ。

二人は、きれいな馬たちを見上げながら、足音を立てないように厩舎の中を進み、揃つて足を止めた。一番端の馬房に真っ黒な巨大な姿が見えたからだ。エミールとサイラスの興奮は最高潮に達した。

これ以上はとて近づけなかつたので、馬を脅かさないように小声で囁き合った。

「——いた!」

「ほんとに黒主だ!」

「ちゃんと馬房に入つてる!」

「でも、兄さん。柵が掛かつてないよ……」

通常、馬が馬房にいる時は柵を掛ける。

こうしておかないと、馬は自由に外に出て行つてしまうからだ。

現に他の馬房にはきちんとして柵が掛かっているのに、

黒主の馬房だけは柵が掛かつていない。

こんな状態を発見したら、馬を扱う人間としてはただちに柵を掛けるのが正しい行動だが、だからといって、あの馬のすぐ前まで進んで柵を掛ける?

とんでもなかった。

エミールは九歳、サイラスは八歳だ。

普通なら、まだ馬を扱えるような年齢ではないが、ロアの男もタウの自由民も歩くより先に馬に乗る。

その両方の血を継いだ二人は、今では立派に馬の世話だつてできる。

もちろん乗馬も得意中の得意だ。

もつと小さい頃、初めて鞍に乗せられた時だつて馬を怖いと思つたことなどない。それなのに、根が生えたように足が動かかなかつた。

反対側の入口から誰かが近づいてくる気配がして、二人は慌てて、空だつた手前の馬房に隠れた。

息を潜めている二人には気づかず、ゆっくりした足取りで入つて来たその誰かは、黒主の馬房の前で足を止めた。

「お馬さま。まだお帰りになりませんので？」

老いた声だつた。話しかけている相手は位置から考えると『ロアの黒主』だ。

当たり前だが、馬は返事をしない。

ただ、騒いだりしない馬の様子から判断すると、機嫌は悪くなさそうだと二人は思つた。

「それじゃあ、ちよつくら失礼します」

恐ろしく丁重に言つて、その老人は何と、黒主の馬房に入つて行つたようだつた。馬体のすぐ近くだ。

こんな振る舞いをしたら、黒主が機嫌を害さないわけがない。老人が蹴られるか噛まれるか、二人ははらはらしていたが、何も異変が起きる様子はない。代わりに、慣れ親しんだ音が聞こえてきた。

馬櫛で馬体を擦る規則正しい音である。

それを聞いた二人は今度こそ驚きのあまり硬直し、互いの顔を見つめ合つた。

とても信じられなかつたからだ。

「黒主に……馬櫛を掛けてる!？」

まさかそんなことのできる人がこの世にいるとは思わなかつた。焦つた二人はうっかり物音を立ててしまい、作業中の老人が気がついた。

「誰かいるのか?」

その声がちよつと厳しかったのは馬の世話をする係の誰かがさぼっているのかと疑つたからだろう。

エミールもサイラスも心臓が口から飛び出るかと



思つたが、逃げ出したりはしなかつた。

勇気を奮い起こして、恐る恐る空の馬房を出ると、黒主の馬房から少し離れた通路に立つた。

怖い顔で馬房から出てきたのは既番の老人だつた。隠れていた相手が手下の若者ではなく、まだ幼い少年たちだつたので意外に思つたらしい。

しかも、二人の服装を見れば、身分の高い家の子どもであることは明らかだつたから、口調をあらためて尋ねた。

「坊っちゃん方。どつから来なすつたね？」

エミールとサイラスは直立不動の姿勢を取つた。

この老人は黒主に馬櫛を掛けられる人なのだ。

両親も、ロアの領主の祖父でさえ、そんなことはできない。

ロアでは馬の扱いに長けた人がもつとも尊敬されるのだ。

それは単に乗りこなすことだけを言うのではない。馬に信頼されるのはそれ以上に立派な才能である。

家の召使いとは普通に話しているが、この老人に

対しては最上級の敬意を払わなくてはならないと、二人は幼いなりに肝に銘じ、よそ行きの声で言った。

「お邪魔して、すみません。エミール・ドラです」  
「弟のサイラスです」

老人の顔に微笑が広がつた。

「將軍さまのところのお孫さんかね？」

「はい」

「お馬さまが気になつて見に来なすつたか？」

「はい」

揃つて頷いたが、二人は馬房に近付こうとはしなかつた。

正確には近づけなかつたのだ。

間近に見た黒主の迫力、存在感、威厳すら感じるその姿は到底ただの馬とは思えなかつたからである。ときどきしながら、エミールが勇気を振り絞つて

老人に話しかけた。

「黒主にさわられる人を初めて見ました」

「へい。わっしも、今のお馬さまにさわらせてもらうのは初めてですがねえ。驚きましたよ。前のお馬さまと、ちつとも変わらない」

「……先代の黒主ですか？」

「へい。前のお馬さまが十歳になるまででしたかね。お城へいらした時は、わっしがお世話をしてました。最初はなかなかお側へ寄らせてくれませんでした、が、六年も通ってくださいましたからねえ。最後は蹄を磨かせてくれましたよ」

エミールとサイラスの顔がさらなる尊敬に輝いた。

「黒主の蹄にさわった!？」

そんなことをして足を踏まれないなんて、すごいとしか言いようがない。

恋する乙女のような熱い視線を少年たちから向けられていることに気づいているのかいないのか、老人は再び作業に戻り、大きな漆黒の馬体をせつせと磨きながら話を続けた。

「わっしは、ロアに行ったことはありませんがね、

お二人のお父上から、お馬さまが代替わりしなすつたことは聞いてました。お暇をもらったら、一度、今のお馬さまを見に、ロアへ行ってみたいもんだと思つてましたが、いやはや、長生きはするもんです。まさか王妃さまと一緒に戻ってきてくださるとはねえ……」

手入れの終わった黒主がぶるつと長い首を振つて、一步を踏み出した。まるで小山が動き出したような迫力だった。

子どもたちは悲鳴を呑み込んで立ちつくしたが、老厩番は平然と馬に話しかけた。

「おや、お帰りですか？」

馬は答えなかつたが、老厩番は歩き出した黒主の後を追うように厩舎を出た。

硬直していたエミールとサイラスも我に返つて、おっかなびつくりその後をついていった。

黒主は鞍も乗せていない。手綱も掛かつていない。こんな状態の馬を人の傍で自由に歩かせたりなど、

ロアの男たちでもやらない。基本的に放し飼いで、牧場から馬を連れてくる時は必ず手綱を掛ける。

言うまでもなく事故を防ぐためだ。

黒主はこの王宮に初めて来たはずなのに、堂々と足を進めている。

昇ったばかりの朝日が黒い馬体を燦然と輝かせている。

そこにもっと眩しい人がやってきた。

遠目にその人の姿をちらつと見ただけで、二人は飛び上がり、慌てて物陰に隠れたのである。

「グライア」

王妃は昨日、大広間で見た時と同じ服装だった。

違うのは表情だ。はじけるような笑顔だった。

朝日以上に輝かしいと二人は思った。

王妃は自分たちにはとても近づけない黒馬に手を伸ばし、太い首筋を撫でてやっている。

黒主も嬉しそうに、大きな顔を優しく王妃にすりつけている。

子どもたちは息をするのも忘れて見入っていた。

十年に満たない彼らの人生経験でも、『とつてもきれいだ』と感動して見つめたものはいくつもある。

ポーラさまの焼いたつやつやのチョコレートケーキ、色紙で飾られた油の滴る鳥の丸焼き、父がつくってくれた子ども用の新品の鞍、華やかな衣裳を着て父の隣で微笑む母。何より風を切って走る馬の姿。

しかし、こんなにも心奪われる光景は見たことがなかった。

ロアに君臨する霸王と、天から降りてきた勝利の

女神はそれほど美しかった。

紫光りする漆黒の馬体と、王妃の黄金色の髪は見事な対比を成している。

まだ幼い彼らには、今の自分の感情を的確に表現することはできなかったが、ほとんど恍惚となつて、うっとり見惚れていた。

王妃はひらりと身軽に黒主にまたがった。

鞍も手綱もないのに、それを合図に馬は歩き出し、

足下の老厩番が馬上の王妃に声をかける。

「下までお供致しますです」

「それじゃあ、ゆつくり行こうか」

厩番の足取りに合わせて、黒主は妙にのんびりと、散歩を楽しむかのように正門へ向かった。

エミールとサイラスは惚けたようにその後ろ姿を見送ると、我に返って、慌てて離宮に駆け戻った。

急がないと、召使いが二人を起こしに来てしまう。

誰にも見つからずに無事に部屋まで戻り、たった今起き出して着替えましたという何喰わぬ顔をして、二人は居間に出て行った。

朝食は二の郭の屋敷で取る予定になっていたので、兄弟は召使いと一緒に離宮を出て、正門をくぐった。

つい先程、この道を、黒主と王妃が下っていったはずだ。今はもうその姿は見えなくなっているが、

二人は大手門のほうを見ながら、小声で囁き合った。

「すごかったね……！」

「ああ、すごかった……」

ユーリーとセーラはいつもの時間に眼を覚まし、いつもと同じように朝食前の鍛錬に向かった。

他国には日々遊び暮らす大貴族もいるらしいが、少なくともサヴォア・ベルミンスター両家の日常は禁欲的なもので、特に子どもたちは、毎日の予定がきちんと決まっている。

早朝から乗馬や剣の稽古に励み、その後は王国の歴史、国内の地理、他国との関係、礼儀作法など、学ぶことはいくらでもある。

ユーリーは近頃、日々の修練に身が入らない様子だったが、今朝は別人のように熱心に馬を駆って、剣の稽古をしていた。

もちろんセーラも負けじと剣を振るった。

その後は屋敷に戻って朝食である。

すると、そこに母親のロザモンドが待っていた。

「おはよう、二人とも」

公爵家ともなると家族のありようも庶民とは違う。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。